学校と社会の協力

——米国の一農村の物語り

パンフレット NO. 11

労働省婦人少年局

学校と社会の協力

——米国の一農村の物語り——

労働省婦人少年局

はしがき

これは米国テキサス州の一農村の物語りで、疲弊したその村が学校を中心とした社会改良計画によつて生き〳〵した共同社会に更生するまでのいきさつを描いたものです。

学校が運動の中心になつたため、教育面における改革が強調されておりますが、教師と生徒と保護者たちが協力して、政府の力をかりずに自分たちの手でよい社会をきずいて行く過程に市民活動のよい例を見ることができると思われるので、日本における市民活動を考える上の参考資料として訳出しました。

なお原書は "School and Community Join in Educating Youth——The Story of One Community's Efforts" で、テキサス大学のホッグ財団一九四七年七月発行のものです。

一九五一年三月

労働省婦人少年局

目　次

第一章　背景……一
社会の困難は大きかつた……四
学校もよくない……七
人間中心の学校……九
第二章　何か変つた……一一
先生の選択と配置……一三
特別訓練の効果……一三
学年開始前の講習会……一四
事例記録が先生を生徒に近ずける……一五
個々の問題……一六
個人相談が不可欠である……一八
日常問題に関する相談……一九
第三章　学校が社会にまで拡張する……二一
母親クラブの活動……二一

コミュニティー全体の保健衛生……二三
給食堂が役立つ……二六
かんすめ場が永続的関心をつくり出す……二七
教師がコミュニティーの一部となる……二八
学校新聞の報告……三〇
教育委員の参加……三一
学校の空気が社会の空気をかえる……三二
訪問講演者がコミュニティーの誇りを高める……三三
人々が学校で遊ぶ……三四
公開討論会……三六
母親クラブがコミュニティー・クラブとなる……三七
第四章　カニンガムは共同社会である……三七

まえがき

子供の成長や生徒の相談制度、又学校と社会の関係等は学者の机上の論としては大へんやさしいものであります。しかし、これらの理論を実際の学校計画の上で試みることは又別問題なのです。

本篇にはテキサス州北部の或る小さい社会で起つた事が描かれておりますが、それはそのこゝろみが大成功したからではなく、むしろ、いろ〳〵な困難な環境にうちかつて、実質的な成果をおさめたことを示すためのものです。他の地域や学校で、同じように青少年の教育の為の理論を実際に行つて行かれる上に、この報告が参考になれば幸いです。

残念ながら、協力して計画することになれない場合には、人々は学校当局や先生の与える刺戟や指導に殆ど頼り切つているものです。それである指導者たちによつてある計画が暫らくの間成功しても、指導者が変つて興味の中心が新らしくなれば前の計画は忘れられてしまいがちです。このことは、専門的な指導者がごく少い農村社会で著しい事実です。しかしながら人々は次第に学びます。親達も教育の進歩ということについて新しい見識を得ます。牧師、農民、商人、役人、その他の市民達も教育は教室にばかりに限る必要はないことを発見してきます。

カニンガムにおけるこの新計画は、精神衛生学を多分に応用したものであることはあまりにも明白

ですから、このまえがきでそれを特に強調することはいたしません。

このカニンガムに於ける実験の顧問であつた、バットンヴィルのT・W・パフォード博士は、長年の間、ラマール郡ひいてはテキサス州全体に対して精神衛生に関する関心を助長させるのに力のあつた人です。北テキサス教育大学の、マール、E・ボニイ博士も教育長の顧問として働きました。又、ホッグ財団が学校やこの地域の指導者達に頼まれて時々顧問を送りました。

この報告は、婦人協会によりテキサス州の各地で行われた社会改良実験研究と密接な関係があります。それで、カニンガムの仕事自身は婦人協会による補助の行われる以前に始められてはいましたが、やがて他の研究の結果と比較されるでありましょう。

この報告にあつかわれている期間中カニンガムの教育長であつたフロイド・マックガーン氏と、その夫人カロリン・ストリート・マックガーン女史はこの計画の指導者でありますが、このお二人の提供による資料にもとずいてこの報告が作成されたのです。フォート・ワースのモーリン・シュノーバ夫人は編集顧問として働いて下さいました。

ロバート・L・サザランド

第一章　背　景

テキサス州カニンガムは地図にものつていない、そして一度入つたらもう今来た道を戻るより他に行くところのない場所です。十の教室がある大きな白い学校を中心とした小さな農村で、ラマール郡のパリスから二十六哩ばかり離れ、又國道から十五マイルもほこりつぽい道を入つたところです。そのほこりつぽい道は、(今は油がひかれて大ていの天気には通れるようになりましたが)テキサス州の中で最も豊かな農地の一つを貫き、サルファ川へとつゞいています。

河の流域にある肥沃な土地、――二十二平方マイルの豊かな生産的な黒土――は、毎年何千梱という棉花を不在地主のために育成しています。自作農場はこの広い面積の大草原の中に只一つしかありません。カニンガム地域は、単作経済、小作人制度、貧弱な道路、そして潜在的生産力の豊かさなどの点で「古い南部」の矛盾そのものなのです。このよくたがやされ、能率的に経営され、大きな利潤をあげている土地の農夫たちは、アパラチヤンの山間に見られる人々と同じくらいに純粋なアングロサクソン人です。彼等は非常に誇りの高い男女であり、出費のわりに収入の非常に少い条件のもとで独立の生計を維持することのできる人々です。

彼等は又、他人に何かをしてもらいたがるような人間ではありません。彼等は働き者で正直で質素

です。けれど、学校が彼らの社会の中心――新しい興味と新しい希望の中心――となる前には、彼らの生活をよりよくするための指導者を持っていませんでした。

一九三七年九月、カニンガムにこの指導者が学校行政の夢を抱いてやって来ました。即ち新しい教育長とその妻が、この土地に対する同情的な興味と、農村社会の問題に対する知識と、子供中心の学校ということの真実の意味に対する理解をもって到着したのです。

◎ 社会の困窮は大きかった

カニンガムの社会が疲れ切っていて、自分で立ち上る前に何か助力を必要とすることは、大して調べてみなくてもすぐ解りました。これらの真面目な人々に対して、自分らがどういう地位にあり、それをどうしたいのかを自覚させることが最初の大事な仕事でありました。

学校がその秋はじまると同時に、教育長とその妻である校長先生との指揮の下にその地域の調査がはじめられました。その地域の人全体の関心と支持を得ることが重要な第一歩でした。高等学校の生徒達は社会科の勉強の一部として調査の仕事を与えられました。親達は子供等が話すこの新しい教授法について、はじめはそれ程熱心に耳を傾けませんでしたが、しばらく後には従来学校のことについて抱いていた以上の興味をもつようになりました。

調査の結果あらわれた事は大してむずかしいことではありませんでした。しかし、それははつきりした解り易い言葉でこの地域の状態を描き出しました。即ちこの地域にある一一七戸の農家のうち、窓に金網のあるのはわずかに一六戸であり、二戸だけがペンキで塗つてあり、五分の一近くが三室以下でした。

わかつたのは住居の問題だけではありません。道路の状況も嘆かわしいものでした。雨が降るとその地域全体が何日も何週間も孤立してしまい、又同時に一軒々々の家も互いに連絡できなくなるのです。舗装道路は、十五マイルも長いじめ〳〵した黒い泥の道を歩いて行かねばありません。学校バスはその学校にはなく、もしあつたとしてもこういう時には走ることはできなかつたでしょう。結局雨の日は学校に行かないで家にいるより仕方がありませんでした。

この調査の結果、その社会の数えきれない程多くの争い――重大なものやささいなもの――も明るみに出されました。住民の六〇パーセント位はペンテコスタル教会に属してはいましたが、信者は分裂して村の中に四分派ができていました。この状態は他の不和の場合と同じく、中立地帯がないということがその理由の幾分かをしめていました。誤解と無関心の為に、多くの家庭が学校に対する大つぴらな敵意をもつていました。ある人々は学校は子供だけのためのものであり、そとの人はそれに関係する余地がないと思つていました。他の人々は先生はよそ者で、教えるためにこの村にいなければ

ならない間だけいるのだと思つていました。教育委員はいつも学校当局を信頼しているわけではなく、又学校当局も教育委員を全面的にいつも信じてはいませんでした。先生達はその争いの中でどうしてよいかわからず、その不安な気持からお互に疑いあうようになつていました。学校の生徒達もどうしたらよいかわからず、その結果学校に反抗することが多かつたのです。

こういう状態の場合にありがちなように、いろ〳〵な不和はこんがらがつていました。個人的な不幸も社会的不満と混同され、貧弱な道路、資格のないハイスクール、及び不適切な住居などはみな、この地方が政治的、経済的な差別待遇のぎせいになつているためだと考えられがちでした。学校、社会及びお互い――それに殆ど自分達自身――に対する否定的な態度がこうじており、村の人々はどんな場合にも守勢的な態度をとるのでした。学校の先生達と保護者達の間は、先生達が経済的に安定して来ると特に緊張して来るように見えました。

統一感や、共同の目的をもつているという意識、又同じ社会に属するという考え方は、その調査の結果全然見当りませんでした。もしコミュニティーとは、共同の興味や問題により密接に結ばれている一つの地域であると定義するなら、カニンガムは一つのコミュニティーとは到底よぶことはできない状態でありました。

◎学校もよくない

村の状態に関してこのようにくわしい調査が行われたと同様に、学校それ自身に関しても同じく詳細な調査が行われました。学校と社会が協力すべきであるならば、両者とも注意深く研究しなければならないからです。

学校の中で健全の折紙を文句なしにつけることができたのは建物だけでした。建物は新しくて、上手に設計され、白く輝いて居り、採光と通風のよい十の教室があります。まわりには適当なひろさの遊び場と増築の余地があります。

しかし多くの綿栽培地では一学年は最大六ケ月か七ケ月ですから、子供たちが学校で過す時間は限られていました。先生達は重荷に苦しんで居り、それに明らかな行政的方針がありません。現職教育の計画もできていません。生徒の社交生活は全く課外の事と考えられて、校内では行はれませんでした。

もしその時に誰か・教室のあの作りつけの座席を動かせる椅子と机に換えること、教室の壁の伝統的な灰色をもつと快い色にぬりかえること、先生方は教師であるとともに子供の友達であり相談相手になれるものだということ、そして、いつかカニンガムは「明るい学校」計画を代表することになるで

あろうといつたとしても、学校の生徒は勿論 彼らの親達も異口同音に疑問を発したでありましよう。けれどカニンガム学校の行つた調査は客観的なものでありましたし、又村の人も協力したものであつたので、調査の結果は村人達にも受入れられました。そしてこの調査によつて大変はつきりと、しかも公平に指摘されたいろ〳〵な状態について、何とかしなければならないということが人々に受入れられたばかりでなく実行にうつされたのです。

教育委員会は村や学校について学んだことに対して関心をもち強い印象を受けました。教育長と共に、委員会は学校改革のため五ケ年計画を決定しました。村全体の進歩は学校自身が原動力とならねばならない、そしてそれは時間のかゝることであろうということが皆に認識されました。

仕事の分野がきまりました。先づ第一に教育方針――学校のなすべきこと、その目的、その原則、生徒や社会の扱いかた――を樹立しなければなりませんでした。

次に生徒一人一人の記録を作ることになりました。教育課程においては学課そのものよりも生徒自身の方に重点がうつされました。学校に関係のあるどんな事がらもみんな青少年の教育の一部として考えられその扱いをうけました。

一人一人の子供の成長を大事にしてそれに努力と関心を集中しようという場合には相談と指導が必要であることを考えて、教育委員会は二名の職員が時間制(パートタイム)で相談の時間をもつことを裁可しました。

又学校は、その財政及び職員の能力の許す限りの大きな新教育計画を試験的に設けました。

どんな学校でも非常に遅れた生徒と進んだ生徒がいることが問題になり。カニンガムも例外ではありませんでしたが、この計画は一番遅れた子供も進んだ子供も、平均の子供と同じように成長することのできるように考えられたものでした。その意味から、生徒が特別によい仕事をしたときは、その仕事の点数は別として褒美をやること、生徒が一人のこらずリーダーとなるような機会を与えるように全力を注ぐべきことが決められました。

これは小さな計画ではなく、一日にして成るような仕事ではありませんでした。けれど先生たちはこの計画を文書にし、教育委員と論議して、これが現実に行うことのできるものであることを示しました。そこでカニンガムの学校は、月並な田舎の学校から地域社会全体につながる進歩的な学校へと変化することになつたのです。

⑥ 人間中心の教育

カニンガム学校は何をしようとしたのでしようか。その目的と主義は何であつたのでしようか。学校が責任をもつてあずかつている生徒たちや、学校が属している社会全体に対してどういう態度をとろうとしたのでしようか。これらの問題に解答が得られ、その解答が毎日の生活に実行されるように

なつた時こそ、カニンガム学校の理想が現実となるわけです。

職員会議は、これらの問題についてのパネル討論に変りました。新しい教育方針の目的が一人々々の生徒の幸福と福祉にあることはみなの同意するところでしたが、それをどういう形に考えるかについてはなか〳〵妥協点に達しませんでした。

先生達は子供等の肉体的、社会的、心理的な問題を正確に知ることが必要になつて来ました。職員会議は、児童の成長進歩についての原則をもつと理解しようとする研究会、討論会としてくり返されました。その結果先生達は指導（ガイダンス）ということを理解しはじめました。又生徒達の非社会的行動は生徒が問題に協力出来ない場合に生ずるのだということを理解しました。このように教育における精神衛生も理解されて来たのです。

しかしこういう計画を成功させるためには親達が子供の学校生活の一部として考えられなければなりません。先ずホーム・ルームの母親クラブの組織から始められました。職員会議が研究会になつたと同じく、母親クラブの定例会合も研究会になりました。職員の間で論議されるものは母親の議論の話題ともなりました。このやり方を通して職員と親達の間も密接になりました。

生徒達も仲間外れではありません。高等学校の全級で学校の理想についての論文を書かされました、生徒会においてもいろ〳〵な問題のパネル討論が行われました。

第一年目のプログラム中の白眉は、母親クラブがその村中の両親達をよんで集会をしたことであります。この晩にカニンガムでは初めて著名な教育者を講演者として招待し、その話をきいたのですが、それを通して自分達が大きな教育計画の一部であることを人々は認識したのであります。その講演者は教育は親達と教師と生徒の協同の仕事であることを強調しました。このうちの誰が無関心であつても、学校は決して社会のために最善の貢献をすることはできないこと、又家庭を学校から全然切離し、学校を家庭から切離しては考えられないということを話しました。

第二章　何か変つた

一旦学校の方針が学校当局、先生、親達と生徒達の心の中にはつきりわかつて来ると、カニンガム学校の生活が目に見えて変化して来ました。

生徒会、卒業式、学校新聞、運動会、食堂、学校バス――皆どれも教育の一つであることが認識されて来ました。即ちこれらは生徒達が互いに協力して生きることを学ぶ機会や環境として考えられたのです。

学課における変化も、いわゆる課外授業に対する態度の変化と同じく著しいものがありました。個

人の成長ということが重要視されたのです。即ち、生徒の人格の尊重が考えられ、競争よりも一人一人が進歩することに重点がおかれるようになりました。

小学校教育で最も重要なものと考えられたのは子供達の性格の安定ということです。学課についての修練はそれ自身が目的なのではなく、自信をつけるための手段であると考えられるようになりました。教室における授業は一歩進んでグループ活動になりました。子供達が集団の中で適応性を発展させ、他人に求めると同じく与えることを学ぶようにと先生たちは努力を集中しました。

カニンガム学校でも、勿論学課は依然重要と考えられていましたが、学課のとりあげ方がかわりました。知識や技術は必要ですが、それに各生徒がどのように適応するかということによつて、その重要性がはかられました。

一般に主義というものは単に語るための言葉でありすぎて、行動のための言葉でないきらいがあります。カニンガムはこれを是正しようと努めました。勿論これは長い時間を要する仕事で、それには注意深く組立てられたコミュニティー教育計画や、先生のための現職教育や、先生、両親、生徒との個人的相談が必要でした。

又、目標を希望通り完全に達するというわけにはいきませんでしたが、学校には新しい気分がみなぎり、それが生徒の適応や業績に及ぼした効果は十分満足すべきものでした。

⑤ 先生の選擇と配置

学校全体で考えたこのプログラムの成否を決する鍵は先生です。先生の人格、先生の個人的な、或いはコミュニティーへの適応度、ガイダンスとしての教育法に対する先生の理解と同情、学校内での先生の配置などは皆重要な考慮の対象となりました。教育委員会もとの主義の下に喜んで新しい先生を選ぶなど明かな協力を示しました。

このような制度の下では、先生は喜んで時間とエネルギーと努力を仕事に注ぐ人でなければならないと誰もが考えました。この仕事は一定の時間内に限られる仕事ではないのですから……。子供の好きでない先生はこのプログラムには不向きです。担当する子供や青年を扱うにはどんな場合でも親切と同情と理解が必要です。又、学校に入つた許りの小さい子供達は一番助力を必要としますから、初等科の先生の選択には特別の注意が払われました。

⑥ 特別訓練の効果

一九三七——三八年度の先生が選ばれると、いよ〳〵新しい計画を教室で行動に移す仕事が本格的に始められました。ところが殆ど全部の先生が特別訓練を必要とすることが間もなくわかりました。

そこで先生方は最も新しい教育方法を学ぶために、一九三八年の夏、それぞれ自分の選んだ大学の夏季学校に行くように云われました。先生方はむろん同意しました。

その秋、先生方が学校にもどつた時、学期開始前の職員会議で新しい学習過程（コース・オブ・スタディ）が示唆されました。この学習課程（コース・オブ・スタディ）を各学科について全学年に実施しようというのです。この時いろ〳〵な委員会が指名されましたが、その仕事は学期半ばに終了しました。

◎学年開始前の講習会

毎年、学年の始まる前少くとも四五日間、カニンガムの先生方は現職教育講習会に集ります。これは新任の先生にとつては、新しい学校とその主義や行政、職員や生徒になじむ機会であります。教育委員会のすゝめでこの講習会の期間に対し先生方に給料を払うようになりました。

学期中と同じように先生方は毎日学校に集ります。討論は学校の主義政策からコミュニティーにおける諸関係へ、学課の改正から生徒達の問題へ、事例記録（ケース・レコード）から時間割へ、当面の目標から長期目標へと及びます。

くつろぎがこの講習会の主旨で、誰もかも質問し、討論し、提案する機会を持ちます。こういう計画が妥当であることは、この学校の制度に始めて接した先生がこの講習会に出る機会を持たない場合

には、なかなか学校の一部になり切れないと云うことを見ても察せられます。

学年の間にも職員はしばしば集ります。こういう打ちとけた集りは、訓練と名案の絶えざる源泉として役立つ許りでなく、職員間の結合を堅くします。

先生方はガイダンスの専門家や、熟練した相談役でなければならないというのではなく、反対に教育とは個人やグループのガイダンスであると考えるように先生方は教えられます。これがカニンガムで明かにしようとした特異点で、教育に対する考え方、態度が問題なのです。

同時に、生徒を扱うに当つては、自分自身の創意や想像や技術を使うべきだという気持を先生が持つように努力が払われました。カニンガム学校は生徒の個性と共に先生の個性も認める学校ですから、これというきまつた型の教育法を先生方に要求することはないのです。

◎ 事例記録（ケース・レコード）が先生を生徒に近ずける

学校当局や他の先生方と見ず知らずのまゝ仕事を始めるわけに行かないのと同様、先生は自分の生徒を知らずに教室に入つて行くことはできません。

そこでカニンガム学校では全学年の全生徒のケース・レコードがちゃんと整えられており、その中には各生徒の性格の詳細な分析や、性格評価基準や、成長記録や、写真や、今日までの成績表が含ま

れています。

◎個々の問題

新教育法がカニンガムで試みられ始めた時に一番目立つた問題は、教室で生徒達の程度が低いことでした。これは当然な問題であり、先生方の従来の訓練に直接結びつけて考えられる問題であり、新教育プログラムの他の面を計画している間に解決して行ける問題でもありました。

学期が非常に短いことが生徒達のアチーブメントのはかゝしくない最大の原因でした。勿論これは教育委員会の扱うべき問題であり、予算の思い切つた切りかえが絶対必要です。コミュニティーの実情を調査したり、学校の主義を討論したりしたおかげで、教育委員達が新しい理解を持つていたゝめ、この障害は大した困難もなく取除かれました。

年の割に学年が遅れていたり、進歩が思わしくなかつたりして生徒達が失意にあることと、又退学者の率が高いことなどは大きな問題で、各生徒について事情を研究しなければならないことでありました。そこで成績表以外に記録制度をもうけました。勿論第一年目に完全な記録を整えることは不可能ですが、とにかく着手しました。

二年目にこの試験的な教育計画は、年に二回のアチーブメント・テストを含むところ迄拡張されま

した。知能テストは一年目に施され、二年目には性格テスト及び各生徒に対する教師の評価が加えられました。

新しいプログラムには、刺戟のためその進歩を計ることのできる何か目に見えるものが必要です。カニンガム学校でもはつきりした結果を確めるために、二つのグループの生徒を選んで綿密な観察をすることとなりました。即ち、新しい教育方針のあらゆる特色を五年生と七年生の学校活動に具体化するようにしたのです。そしてその結果を確認するために、四年と六年を比較グループとして、一般的、伝統的な教育法を施すこととしました。

個々の子供のリーダーシップが成長するかどうかで、このガイダンス教育法の成功不成功を計る基準とすることにしました。そこでリーダーシップ表(スコア)が生徒の任意で記入されることになり、同じ表(スコア)は比較グループの方にも備えられました。

一年の研究の成果は決定的だつたばかりでなく、その結果すべての子供の持つリーダーシップの芽を伸ばすことに先生が興味を持つようになりました。

どのクラスでも約五パーセントの少数者が名誉と表賞の八十パーセントを独占していて、生徒がリーダーとなる機会は非常にかたよつていることがわかりました。そのほかの生徒の大部分は自分がリーダーになる機会に恵まれないのを運命と諦めているようでしたが、一部の者は少数者の支配や、先

生の霊性なえとひいきや、不健全な授業の仕方を憤っていました。確かにこのグループは、民主的原理に基いて行こうとしている学校に重大な問題を投げかけていました。規律の問題でも表賞が一部に偏つて与えられているのは明かで、生徒達は独裁的な、しかし自分よりも性格的におとる生徒の不健全なリーダーシップのぎせいにすぎなつてしまうのでした。

この研究の結果がわかつてから、先生方はリーダーとなる機会をもつと公平に与えるようにあらゆる努力をしました。こうして、注意深く検討し研究した教育方針の原理は、すみやかに実際に適用されたのです。

◎ 個人相談が不可欠である

先生がどんなにたくみに教室で授業できても、生徒達は個人的な問題についてもつと別の助力を必要とすることがわかりました。そこで顧問――特にそのための時間を教育委員会から与えられた教育長と校長――に相談する時間がもうけられました。

先生方は、子供の悩みがどんなに些細なものであつても、それが注意に値するものであることを知り、そういう問題を解決せずに放つておくと生徒の野心を鈍らせ、希望を挫き、総体的不幸を齎すものであることを職員会議で学びました。

顧問も個人問題を扱う上において自分たちの能力の限界を勿論知つていました。極端な性格異常を扱うことのできる学校は殆どないこと、彼等の学校は勿論そういう準備がないことを前提として彼等は仕事をしたのです。そして教師や教育委員会やコミュニティーに対して、そのような問題は専門家だけに安心して委せられる問題であることを強調しました。

◎ 日常問題に関する相談

カユンガム学校の顧問は何年もの間にさまざまの問題に対して――他の人々には大して大きな問題ではないが学校としては大切な――助力を与えました。

顧問と生徒たちが考えた問題とは次のようなものでした。――

わるい姿勢のために少年少女が可愛らしさを失つて、肉体的に不幸を感じること。眼がわるいために成績がわるくなること。数学に対する恐怖と、そのために起る勉強の行き詰り。両親――母か父か又はその両方――に対する守勢的態度、及びそれが教師との関係に及ぼす影響。姿勢や視力以外の肉体的欠陥、及びそのために学課や課外活動への正常な参加が妨げられること。必要品又はちよつとした奢侈品を買うお金がないこと、及びその不満感。盗み及びその種々の原因。体の大きすぎること、小さすぎること、太りすぎ、やせすぎ、及びそのために不幸だつたり、友達に受入れられなかつたり

すること。これらは何処の学校でも少年少女が持つている切実な問題の数例ですが、カニンガムではこれら及びその他の多くの問題に対し同情ある理解が与えられました。問題を持つた生徒に対して、又問題自体に対して妙だとか、下らないとか、馬鹿々々しいとか考えられるようなことは決してありませんでした。カニンガム学校の記録から二三の事例研究（ケース・スタディ）を取出して、二人の顧問が学校や社会の生活をよりよくするためにどんなふうに問題解決を助けたかを示しましよう。

（事例はやゝ専門的なので省略します）

此処では相談と先生の協力を通じて問題がどう扱われたかを示すに足るだけの例を述べましたが、盗みをも含む七つの難しい例の中、六つまでは満足すべき解決を得ています。引込み勝ちな傾向を示生徒の大部分はなおつて来ていますし、否定的態度も殆ど満足に解決されています。発育不良の問題も緩和されました。カニンガムの顧問と先生は、青年や子供の性格の問題やリーダーシップの欠陥は、多くの場合教室の日常の環境や、学校における友人関係や、家庭内の家族関係から生れて来るという意見を持つています。そしてこれらの問題は努力と心づかいとによつて調整することができるのです。

カニンガム学校の相談計画は、授業や課外活動と密接に連絡をとりながら、ハイスクールをおえようとする生徒達が、家庭や社会に貢献できる有用な市民となるようにと力を尽したのであります。

第三章　学校が社会にまで拡張する

先生の準備教育や現職教育、教課の再編成、新教育法の凝励、記録制度の整備、クラス内外でのリーダーシップの分布と機会の研究、授業と密接に結びついた相談計画（ガイダンス）などによつてカニンガム学校が自分の家の整理整頓を始めた時にも、コミュニティーそのものが忘れられていたわけではけつしてありません。コミュニティーに受け入れられなくてはどんな学校計画もすゝめることはできないのですから。母親クラブ、新聞、コミュニティーの会議、教育委員会、職員会、生徒自治体、教育問題講演者及び夜間の学校参観や謝肉祭（カーニバル）、給食計画やかんずめ場を通して学校の問題はコミュニティーに説明されました。

◎　母親クラブの活動

コミュニティー及び学校の状態に関する最初の調査が終つてから間もなく、母親達は団体をつくるために学校に招かれました。この団体は学校のプログラムに対して助言を行い、学校の新方針が何を意味するかについての理解をひろめるという目的を持つものでした。

各組の母親の中から毎年中央グループに入つて仕事をするメンバーが何人か選ばれました。けれど

一度この母親クラブのメンバーとなつた人は何時迄もメンバーなのです。つまり各組から毎年新会員を選出しますが、前年に選出された者はそのまゝ会員の地位に留るわけです。こうしてついには学校中の母親が殆ど一人残らずクラブの仕事をするようになりました。

第一年目にクラブでは活動と研究のための五ケ年計画を立てました。教育委員会の割当てを以ては充すことのできない学校の経費を充すため寄附金が集められました。すぐさま必要なものは、身体検査や保健計画のための施設、初等科の子供のための遊戯設備の改善と拡充、図書室の拡充でありました。

教師の研究と密接に結びついた母親の研究会も行われました。母親たちは先生達が学び研究している事に参加し、それによつて、子供達のために何が行われているかという話をコミュニティー全体へ伝えたのです。

毎年の活動の頂点としてコミュニティー全部の母親、父親のために宴会が催されました。その最初の宴会の際にカニンガムでは、はじめて来賓として教育問題の講演者を招きました。そしてその後ずつと、母親クラブが学校やコミュニティーの役に立つために来る人々、或は学校やコミュニティーから学ぼうとして来るいろ〳〵な人々を接待する役目を引受けて来ております。

◎コミュニティー全体の保健衛生

母親クラブが行つた最大の貢献をたつた一つだけあげるとすれば、それは地域に住むすべての人のための保健衛生ということにコミュニティーの関心を呼び起したことでありましよう。

公衆衛生の改善にはまず保健教育が必要であると認めた母親クラブは、土地の医者の協力を求めました。プログラムの第一歩としては子供の歯の手入と共に、予防注射の問題が強調されました。家庭衛生や社会衛生にクラブ会員が注意を払うようになり、会員を通してこの土地の各家庭の人々にも伝えられたのです。どの農村地帯にもある二つの重要問題――衛生的な便所とはえ退治に特別な重点が置かれました。

いつの場合にも、実際に家庭や社会が悲劇に見舞われるまでは、とかく関心が怠られがちなものですがカニンガムもその通りでした。或る名高い家の子供がジフテリヤで死んだのです。そこで母親達は教師や土地の保健当局と協力して村中の子供と大人に予防注射を行いました。トラクター、荷馬車、自動車、トラックが後から〳〵注射を受ける人々を学校に運びました。こんな新しい方法に対して人々がこれまでどんなひどい偏見を持つていたにしろ、彼等はともかくやつて来て病気から免疫になつて家に帰つたのです。

けれどもジフテリヤの脅威は他の方面にまで手を伸ばす程の教訓を与えてはいませんでした。大規模な種痘が始まつたのは、この地域の人々が天然痘の危険にさらされていることがコミュニティー中に知れ渡つてからのことでした。けれどもジフテリヤの場合程即座に人々は集りませんでした。まだ患者は一人も発生していなかつたので、種痘を希望したのはおよそ六十五パーセントにすぎませんでした。他の人達は種痘は病気よりもこわいという迷信のためにためらつたのです。けれどもたゆまぬ保健教育のおかげで、プログラムが始まつてから七年後には一人残らず天然痘から免疫となりました。

マラリヤや腸チフスも川床の地帯を犯す病気ですが、このサルファ河の地区も例外ではありませんでした。実際「熱と悪寒」を免れる人はめずらしいとされ、腸チフスもあたりまえになつていました。けれども五年間にわたる辛抱づよい努力の結果、腸チフスに対する完全な免疫に達することができました。

便所を衛生的にすること、水を空かんに捨てること、低地域に油を布くこと、家々に金網戸をつけることなども、母親クラブの運動としてつゞけられてきましたが、その結果今までマラリヤのない夏はあり得ないと信じていた人々も、年々彼等の家庭がマラリヤの脅威から解放されて行くのを目のあたりに見ました。

カニンガムの母親クラブの力で始められた保健計画は、遂にはラマ郡の東南部と、レッドリバー郡

の南部を含む百平方マイルの地帯に拡張されました。州の保健当局との協力で各郡に保健所がつくられたことは　カニンガム学校で始めた仕事を大いに促進し、すでに五千回以上に及ぶ予防注射が保健計画開始以来行われました。郡保健所の主催で目下結核の検査が行われています。又歯の治療と検査の大々的計画も立てられております。

学校には人々が予防注射と健康診断にやつて来るので、コミュニティーの保健に関する情報が集積すると同時に、生徒や就学前児童の保健記録も蓄えられました。土地の医師と郡保健所がカニンガムの全初等科児童に完全な身体検査を二度行いました。又徹底的な眼の検査も全生徒に対して行われ、多数の生徒の視力の欠陥を矯正することができました。

カニンガム学校はこのように注意深く企てた保健教育と保健活動を通して、コミュニティーの日常生活に奥深く入つて行くことができたのです。この新しい仕事の結果が誰の目にも重要でしかも成功でしたので、学校がその大きな白いビルディングの中で行うその他のたくさんの新しい仕事に対してもコミュニティーの人々の信頼感が高まりました。その上保健のサーヴィスを受けるために人々が年中学校を訪れる結果、学校の他の施設とも自然なじむこととなつたのです。

◎ 給食室が役立つ

学校の給食プログラムは単に子供に食事を与えるだけのプログラムでもあり得ますが、生徒のための教育的な経験となりコミュニティーを共通の興味で結びつける一手段となることもできます。カニンガムでは給食に後の目的を持たせました。

学校で給食計画が初めて企てられた時、すべての父兄に対して助力が求められました。コミュニティーの集りが通知され、父兄達は余分のお皿を全部持つて来て下さいと頼まれました。その夜とその翌晩に簡単な会合がひらかれ、両親達は喜んでやつて来て、学校の新企画のためになにがしの寄与をしたのでした。

その集りで十分に手に入らなかつたお皿は母親クラブが買い求めました。給食室をつくるためのお金はコミュニティーの寄り合いの席で集まりました。一年目が終るまでには、どの両親も何等かの形においてこの計画に貢献したのでした。

給食室の管理を生徒自身にさせるようにしたことは、この活動に生徒をしつかり結びつける最もよい方法でした。高等科では授業時間に管理問題を討議させましたし、又給食の食物について討論することは一人々々に栄養の知識を授けました。

生徒達が企画した管理方法には、給食室に秩序正しく入ると、と並が書まれておりました。当番には毎日別のクラスが当りました。ホスト、ホステス、及び七人のガイドも毎日選ばれ、当番クラスの誰かがお断を捧げます。一年経たない中に学校中のどの子供も給食計画の運営に積極的な役割を果すようになり、その年の終りにはそれ〴〵がどんな貢献をしたかを詳細に記入した小さな証明書が与えられました。

給食室に対する誇り、よいお行儀、出されたものを食べるように努めること、食物に対する知識をふかめ、食物が人間の成長に与える影響を理解したこと等が、この生徒管理計画の収穫でありました。

◎ かんづめ場が永続的関心をつくり出す

給食が始まつてから二年目の夏、給食室は給食用並びに家庭用のかんづめ場となりました。かんづめをつくるには先ず菜園をつくらねばなりません。学校給食のかんづめを作るために、今迄野菜等を育てたこともない家庭に菜園がつくられました。校内活動がコミュニティー改良の仕事ともなつたわけです。

かんづめ製造そのものも決して一時的な企画ではありませんでした。教育委員会は夏の間二人の家

事の専門教師をやとい、村の主婦は皆このかんずめ製造期間中の少くとも一日をこの製造所で過じたのです。最初の夏には五百人以上の希望者が働いて、一万個以上のかんずめをつくりました。

これらの主婦たちは最も能率的なかんずめ製造法をおぼえましたが、学校のかんずめを作りながら、同時に自分たちの仕事をするための近代的設備を使う機会にも恵まれました。又彼女達はバランスのとれた献立てはどんなものか、そしてそういう食事を家族の者が一年中とれるようにするためにはどんな物をかんずめにしておくべきかを教わりました。

かんずめ製造所はもう四年にわたつて仕事をしています。そして村の家々の栄養は目に見えて改善されて来ています。その上婦人達は共に働く事によつて共に語る機会を持つので、お互いの理解がまし、昔の偏狭や偏見は消えつゝあります。

◎教師がコミュニティーの一部となる

家事の専門教師がかんずめ場でコミュニティーの指導者となつたように、他の先生達も生徒の親たちの生活に積極的な役割を演ずるようになりました。学校がコミュニティーの中心となり始めた当初においては、先生方は自分が一年の大半を其処で過している筈のその土地の人々から幾分超然をしているようなところがありました。そこで「あの先生」を「私達の先生」に、「私の教えている子

土地」を「私の住んでいる私の土地」に変えようとする努力が図られたのです。

といつても人間関係というものは一夜にして変るものでもなければ、無計画に変るものでもありませんから、教師と社会の人の協力方法が綿密に検討され、より密接な、より親しい相互扶助関係が生れるような手段が案出されました。先生方は少くとも月に二回の週末は村に留まつて、社交的な催に加わつたり、自分の好む宗派の教会に出席したりすることを奨励されました。

家庭訪問――これはいつも専門的な生活改善計画や農業改良計画の一部として行われましたが――の重要性はすべての先生に対して強調されました。新しい就任したての先生はうけもちの生徒の両親にあつて彼等を知ることを求められました。

むろん先生方は村に留つたり、家庭訪問をしたりすることを無理に強要されたわけではありません。けれども大部分の先生は、こういう仕事によつて教育の能率が上る許りでなく、彼等自身の生活への興味が深まることを見出したのでした。

先生と両親との間の親しみを深めるのに非常に役立つた一方法は、先生達の劇クラブだつたと思います。むろんこれは多くの先生方の劇に対する興味から発生したのですが、先生同志の協力や　学校と社会の結合に非常に大きな役を果しました。

年々二回か三回づゝ全教員が出演して劇が上演されました。上演後には観客と俳優が一しよになつ

て寛いだパーティーを開きましたが、これが又催しに一しおの楽しみをそえるものでした。これまでに舞台演芸というものを見たことのなかつた人もたくさんいたのですが、こうして劇は土地の人々の生活の一部ともなりました。

先生方のこういう努力は先生と人々との関係をより親密にした許りでなく、同時に彼等自身の生活にも活気を与えました。しかしそれより更に大切なことは、子供を教育する上で最大の責任を持つ二つの力——両親と教師とが互いを知り合い、互いの問題に同情の手を伸し、青年や子供を共通のきずなと感ずるようになつたことであります。

◎学校新聞の報告

カニンガム学校は、いやしくも行う価値のある仕事は語る価値があるという前提の下に仕事をしました。学校で行われるさまざまの活動に関するニュース記事——学校大会プログラム、劇、かんずめ場の集り、給食活動、教師の任命、生徒の業績、入学者や退学者、クラブの催し、訪問者等々——は皆パリスやその他近くの町の新聞に送られました。

過去八年の間にカニンガムは学校の情報活動のためにあらゆる手段を用いて来ました。週刊新聞、日刊新聞、保護者のためのとうしや刷り情報、方々の会合での談話等は、いずれも学校がなし遂げよ

うとしていることをよりよく理解させる機会をつくりました。

学校新聞もこれらの方法の中で見劣りするものではありませんでした。この八頁の新聞は月に二回無料で村中に配布されましたが、それには生徒達が学校生活の殆ど全面にわたる記事――学校の動きや校内の問題に対する論説、学校財政の発表、運営の新しい面の説明、いろ〳〵な計画の紹介、それに学校やコミュニティーに大きな貢献をした生徒や両親の名前を書いてのせました。学校新聞は情報や説明の泉であるばかりでなく、学校やコミュニティーに対する人々の話の泉ともなつたのでした。

◎ 教育委員会の参加

新しい教育長はカニンガムに来た時に、こういう忠告をしば〳〵耳にしました。「仕事をうまくやりたいとお思いでしたら、誰々さんにお会いなさい。あの方が中心人物ですから…。」けれども教育委員会というものは多数の男女委員の集りであつて一人の人物ではないはずです。少くともこの新任の教育行政家はそう信じておりました。

そういう弊害を改めるために、彼は委員がすべて何かの特別委員会に入るようにはからいました。又委員会の月例会議を企て、各委員は出席を承諾しました。会合の議事日程は前以て定められ、少くとも年に四度は財政報告が提出され討論にかけられました。教育長は村の外で行われるいろ〳〵な学

校関係の会合に招かれた時には、いつも出来るだけ多くの教育委員を随伴するようにしました。教育委員会にとつて興味ある教育記事があつめられ研究に使われました。教育長は委員会が一体となつて考えたり行動したりできるようなあらゆる手段を講じたのです。

三年の任期の間に委員が欠席したのは僅かに合計五回でした。同時に、学校全体、先生、先生たちの悩み、生徒などに対する委員の興味は目立つて増しました。どの委員も自分がこの進歩的な生き〳〵した学校社会の大事な一部であることを感じ始めたのです。

◎ 学校の空気が社会の空気をかえる

この計画の始められたころは、生徒の気風は低調で、一つのものに所属しているという考えの欠如は委員会同様生徒の間にも顕著でした。その証拠には学校の所有物は盛に壊され、机は傷つけられ、無断欠席が行われ、学力は低く、校則は大つぴらに破られ、学校の政策は生徒に支配され、先生と生徒の間には公々然のえこひいきが存在し、愛校心など〳〵いうものは見当りませんでした。

生徒達に学校は彼等のものであり、彼等のためのものであつて、彼等に敵対するものでないことを感じさせるためには、生徒活動を徹底的に組織し直し、学校に対する生徒の態度をつくり直すことが必要でした。

新しい教育法の実施。生徒の学力のおくれとその原因への考慮が払われたこと、多くの生徒にリーダーとなる機会を与えたこと、個々の生徒自身と生徒のもつている問題に対して教師や顧問が関心を示したこと、学校や社会のためのリクリエーションの増大したこと、学校大会や給食活動を生徒が自分で管理し運営したこと、学校当局や職員が生徒の意見に耳を傾けたこと等によつて、生徒たちの態度や行動は次第に変つて行きました。

数年にわたる生徒、教師、学校当局の真剣な努力の結果、学校は協力精神を持ち、つねに人々の憧の源泉となり、忠誠と親愛を捧げられるようになつて来ました。その結果のめざましい一例は、生徒だけの手で最近行われた卒業式です。来賓の話の代りに、卒業するクラスの青年達が七百人以上の聴衆の前で「青少年問題に対して家庭、学校、社会は如何にすれば効果的に提携できるか」というパネル討論を行つたのであります。

◎ 訪問講演者がコミュニティーの誇を高める

学校やコミュニティーのためのプログラムが残らずその土地の人々の手でできるというわけではありません。いろ〳〵な分野における外からの専門家——農業経済から地域社会団体、教育実習、教育行政、精神衛生学、心理学に至る迄の専門家が、何年もの間にガニンガムにやつて来て話をし、討論

を両会しました。

これらの講演者は情報や名案を与えることのほかに、村の志気を鼓舞しました。彼等の来訪によつて、又彼等がこの村及びそこにあるいろ〳〵な問題に対して興味を示すことによつて、村の人々は何か重要視されているような快さを感じました。彼等は丁重に迎え入れられ、人々はよく会合が終つてからもいつ迄も会場に居残つて、会議中に行われた討論の続きをしたりしました。こうしてカニンガムでは、成人教育と、コミュニティー魯重の感情を培うこととが、しつかりと結び合されて来たのです。

◎人々が学校で遊ぶ

けれどもカニンガムではこのようにいつも仕事ばかりしているわけではありません。遊びもまたこの勤勉な農民の生活にとつて重要な役割を持つようになりました。社交という言葉の新しい、より深い意味が、明るく灯のともつた建物の中で人々が楽しく集い寄つて過す時間から生れて来ました。

毎年の始めに何時も学校の夜間参観が行われます。この時には大低昔なつかしい音楽がかなでられ、何か演芸が行われます。生徒の保護者たちが学校の設備を見て廻り、欠陥を指摘し、最近の改善ぶりを見ます。先生方と委員達とは生徒に手伝つて、この年中行事のホスト、ホステスをつとめます。

生徒達はこの間にいろ〳〵のことを実演して見せます。彼等がどんなふうに学校新聞をつくるか、家庭科の授業は実習小屋の中でどう行われているか、社会科学の授業では討論がどう進められるか、給食はどう運営されるか等をやつて見せるのです。

年中活動の中の白眉は十二月に催される栗鼠シチュー又は魚フライの集いです。この時にも村の人々は寄り集り、キャンプ・ファイアを囲んで食べ語り且つ歌つて仕事と苦労を忘れるのです。

パイ料理の夕、ビンゴーの会、歌の夕、蔵技の夕、生徒の夕等は、すべての年令の人々に充実した生活を持たせます。

万聖節前夜（ハロウィン）――伝統的に学校の謝肉祭となつている夜――には来られる人は皆学校にやつて来ます。すべての人のための余興や、小間物から食物まで何でも売つている屋台店や、あらゆる種類のゲームなどが宵のにぎわいを一しお増し、子供や青年を夢中にさせます。

こういうリクリエーションを準備するための骨折りには、学校職員と両親と生徒が一つになつて当ります。そして一しよになつて遊ぶことが大切であるばかりでなく、遊ぶ前の仕事を一しよにすることがコミュニティーへの所属感を深めることをカニンガムの人たちは知つたのです。

◎公開討論会

最後にかけがえのないものは両親と教師の公開討論会です。月に一度人々はより集つて興味ある問題を話し、一しよにプランを立てます。無口と内気に慣らされた農村の男女にとつて「会の席上で話す」ことを学ぶのは易しい仕事ではありませんでした。けれどもリーダーの細かい心づかい、寛容と理解に満ちた雰囲気、どんな意見に対しても示された尊敬、それに全体にみなぎる親しみやすい気分が、とう〳〵最初の難関を乗切らせました。

その皮切りをしたのは母親クラブの仕事をしている婦人達でした。彼女達はクラブの会合で討論の方法に親しみ、パネルやフォーラムに参加することに馴れるに従つて、全村の集りでも次第に大きな役を演ずるようになり、とう〳〵他の人々をも知らず〳〵の中に討論に引き込むようになつたのです。

これらの討論会はコミュニティーの鼓動を感じ、その関心を測定し、その批判を認識し、その将来の活動を計画するための絶好の機会を提供してくれるものです。

討論会の晩には皆が学校にやつて来ます。他の乗物の便を持たない人々のために学校バスが走ります。こうして人々がおしやべりをしながら相乗りして来ることによつて、お互いの間のへだてはすつかりとり除かれます。

◎ 母親クラブがコミュニティー・クラブとなる

・五年にわたる母親クラブの活動と、それとほゞ同じ位の年月の間のコミュニティー討論会との後に、これら二つの活動は合併することになりました。今ではカニンガムに住む男女の団体が一つあるだけです。この広い豊かな土地で共に働くことの楽しさと利益を知つた男女や生徒たちが、次の段階として考え出したのはコミュニティーの協議会です。二十二平方マイルの二の土地は、今や自分自身を現実の共同社会建設計画の、又共同社会生活そのものの一部であると感じている人々の集りになつたのでした。

第四章　カニンガムは共同社会（コミュニティー）である

八年前には散り〳〵の農場地帯――住居も人々の考えも散り〳〵の――であつたカニンガムは今では共通の目的と理想に結ばれた活動的な共同社会です。

保護者と教員達の間、学校当局と教育委員会の間、生徒と学校の間に存在した不信感はもうありません。彼等は今ではお互いに、全体のための生活改善を目指す協力者であり友であると考えているのです。

過去八年間の変化をはつきりと描き出すために箇条書にしてみましよう。

一、リーダーシップはもはやコミュニティーを取締ることであるとは考えられないようになつた。

二、リーダーシップは少数者によつて占有されずに、問題、興味、活動の種類に従つてそれ〳〵大勢の人が指導的立場に立つようになつた。

三、リーダーシップはコミュニティーにおけると同様、生徒達の間でも広く分布されるようになつた。その結果、学校の活動により大勢が参加し、表賞がひろく行われ、より積極的な興味が目立つて来た。

四、親も子供も同様に報告しているように、彼等は親子共通の問題を親の独断で片附けないで、親子で話し合うことを学んだ。

五、学校がコミュニティーの中心となつてから、大人達はコミュニティーに対しいよ〳〵大きな責任を持つようになつた。

六、学校の志気が高揚され、備品の破壊、無断欠席、反社会的行動は最少限にまで減少した。

七、学校の出席率が目に見えてよくなつた。これにあずかつて力あつたのは、給食室の設置、教室における精神衛生の適用、交通の便がよくなつたこと、及び学校の気分が一新したことである。

八、保健教育、保健衛生対策の実施及びリクリエーションは人々の生活の無くてはならぬ部分となつ

九、生徒達が学校でする経験はすべて教課の一部と考えられた。そこでスポーツやジャンボリーとか、フェア・プレイとか、民主的精神とかは大多数の生徒の心を先ず第一に占める感情となつた。

十、殆んどの場合、先生達はこの学校計画を受入れ、コミュニティーの一部となり、コミュニティーの中心としての学校で働くことを楽しみ、個人の適応とアチーブメントに重点を置く学校の方針を受入れた。

十一、成人教育は学校の一部であり、学校が社会生活に奉仕すべき当然の仕事と考えられるようになつた。

十二、学課は重要なものと認められているが、教育過程における唯一の重要部分とは考えられない。

十三、お金のかゝる設備を備えたり、職員の数をふやしたりすることが問題ではなく、どのような見解に立つかが問題であり、又いかにして施設を最大限に活用するかが問題であるから、実際の出費は僅かなものであつた。

十四、最後にこの学校及びとのコミュニティーから出て兵役についた百二人の男子と、一人の女子のうち、立派に適応できなかつたのはたつた一人であつた。その他は皆、義務、責任、仕事の上において立派な態度を見せた。

テキサス州カニンガムは今でもやはり泥道と小作問題を持つています。けれども十年前のカニンガムとは違つて、泥道といつても油を布いた泥道ですし、家々はペンキで塗られ金網戸がついていて、庭も清潔です。家庭の人々は健康で幸福で、健全なコミュニティー精神を持つています。

テキサス州カニンガムは今では自らの問題を解決し、自らの必要を充し、自らの福祉を向上させる力を持つています。何故ならカニンガムの人々は、何処にどうやつて助力を求めたらいゝかを知つてゐり、そして——更に重要なことは——ほかのコミュニティーのように敵意や偏狭や偏見にわずらわされることなく、人々が手をつないで働くことを知つているからであります。

一九五一年三月十六日　印刷
一九五一年三月十日　発行

編者　東京都千代田区代官町一番地
労働省婦人少年局

印刷者　杉田弥太郎

印刷所　東京都千代田区麹町五ノ二
杉田屋印刷株式会社